

## ■■ ヒヨウの生活をめぐって ■■

私のここに言うヒヨウとは、山地における木材搬出の作業にあたる者の名であります。木曾を中心として、三河、遠江、駿河等をもっぱらこの称をもって通っております。この地方の木材搬出の作業は、主として木曾の運材法が規範をなしていたようではありますが、これは言い換えれば作業が木曾の勢力圏内とすることも出来るかと思えます。この記録は大正一三年に三河の山地地方を中心として、天竜川、大井川流域におけるこの種作業に携わった人々から主として得たもので、それに私が該地方の実際踏査による考察が幾分加わっております。採訪事業はその後も継続する予定でございましたが、各種の事情に煩わされて停頓の状態にありますので、そのままひとまず発表することに致しました。

以下、言語を中心に列記して見たいと思えます。以上の事情から生活記録としてもほんの断片的なもので、一部の消息を伝えたに過ぎぬものであります。

ヒヨウ ヒヨウの呼称は、簡単に日雇の意にも考えられますが、これはかく単純に決定せらるべきでないと考えます。この種作業に携わる者の直接記録類のほとんど発見せられぬ今日としては、各作業の状態または当事者の生活に即して綿密な採訪を行い、資料の蓄積の結果にまつべきもので、かくして帰納的に解決への途は展かるべきものと信じます。しかしこの山中の伝統生活も次第に改廃せられて、以前の生活は逐次湮滅の歩みを速めつつある状態を想いますれば、一日を空しうすることは出来ぬ感があります。

ヒヨウを称して別にカワガリ（川狩り）またはカワガリ衆とも言いますが、これは作業の一部を川狩りと称したことから出たものと思えます。

そうしてこれは筏師とは作業の性質から看ても別であります。山地の柚の手から受け継いで、筏場あるいは目的の集散地に搬出する、その間の作業にあたるものであります。

あさぎ ももひき はばき  
浅黄の股引にメクの脛巾、ヒヨウの装束を形容して、上如の語が三河の山地等に行われております。メクは盲縞の木綿であります。これはヒヨウの装束を穿った語というよりも、むしろその職業的軽快さを叙したと見ることが近いかと考えます。職業的軽快の語はあるいは意義をなさぬかと思えます。これに関して私はヒヨウの労働性質の上に一種の関心を抱いております。今日の社会において、仮に労働に苦痛でないむしろ楽しいとするものが存在するとの説が承認されるならば、ヒヨウの

生活はその一つとして挙げられるのではないかと思うのであります。日本のある種の労役作業には、宗教意識の影響から当事者にとって一種享樂的ないわゆる祭気分とでも言うべき要素の濃厚なものがあります。一例を挙げれば五月の田植であります。その他ある種の漁業、狩猟等の如きもその一つに加えられるかも知れません。田植の日におけるあの揃いの手拭とか笠、または禳というようなものに象徴された早乙女にとっては、ある時代には一種の享樂的気分を唆るものがあつたことを否定出来ません。

しかしこれは田植行事に伴う宗教的意義ないしは環境によるもので、肝腎の労働そのものはいわゆる辛気くささに域を脱することは出来ません。あの泥濘から受ける感触にしても、いかに習慣によりまして決して快感等の語をもって説くべきではありません。こうした労働に比較すれば、ヒヨウの労役は遥かに陽気であります。その第一の要素としては、作業がすべて団体的であること、次には労役が自然力に順応して成立していたことであります。時には例外もありますが、多くは上位から下位に運搬するあるいは水力に拠つて流す、こうした事実が労働の根本になっていたのであります。それについて

一つの思い出を語ることを容させて頂きます。私の生まれましたのは東三河の山村であります。土地がたまたま川に臨んでおりましたため、ヒヨウの作業はごく幼い頃から目睹していたのであります。そうした環境にありました関係から、玩具の鳶口を持って大人の材木流しの真似をして遊びます。陸上では到底思いもよらない材木が、水中では少年の力でも容易に動かすことが出来ます。それで力任せに鳶口で材木を引っ張ったり、あるいは橋を架け、またはこれに乗って漕いだりします。この遊びと実際のヒヨウの労働の間には、格別の距りは認められぬのであります。言うまでもなく山地等で水の乏しい区間は相当はげしい労役も行われますが、作業に変化があつて仮に苦痛にしても連続的ではありません。少なくとも重き荷を負うて路を行く如き辛苦の気持ちは、ヒヨウの労働にはほとんどなかつたのであります。

こうした抽象論をいつまで述べても果てしがないから一例に留めますが、要するに労働の性質が陽気で呑気であつたことは一般土地の常識もこれを認めておりました。しかもその生活様式には一種遊牧型とも言うべき要素があつて、漂浪的に作業の進捗に従つて次々に変わった土地を訪れて行くこともまた一つの特色であります。さらにヒヨウ自身の言葉にも、これを一口に道楽職業と言ひ、この生活に一步踏み込めば、ふたたび辛気臭い農業などは出来ぬとさえ言ひます。五月田植えの忙しい

最中に、女房に田地を委せておいて、自分は鳶口を昇いで山へ入ったなどの話さえあります。これも這般しゃはんの消息を伝えた一例とも見られます。

**軍陣的作業組織** 木材搬出の作業の一つの特色は、作業がすべて団体的に行われたこととあります。したがってこれを観察します上に、軍陣組織に比較することも一方法とあります。そうして一方には、上代の団体作業の状態を考えさせられるものがあります。この作業技術には現代といえどもなお伝統的方法が骨子をなしていたのであります。

**ヤマ** 作業の団列をこの名で呼びます。一山二山などと言ひ、あるいはオオヤマ（大山）等の語もあります。大山は地廻りの小規模な組織によるものに対する称で、これに携わる者を一にオオヤマビヨウと言ひ、作業が分業的なところから、地廻りの小規模の運材にはこの技術者は適当でない場合もあります。三河の山地等ではオオヤマビヨウは、多く木曾谷の付知付近から供給されていたようであります。この人々の足跡は相当広汎な地域に亘っていて、東は静岡県富士川、大井川、天竜川等の流域に及んでいて、三河の豊川、矢作川等ももちろんその足跡圏内と言うことが出来ます。これについて思い合わされることは、大井川、天竜川間あるいは天竜川と豊川上流等の中間を繋ぐ山地を縫うて展かれた山道は、この人々の交通路で、多くヒヨウ越え等の名があるに見ましても、獵師等の開拓したものではなかつたようであります。ヒヨウの建て前から言へば、これらの地方を一渡り歩いたものでないと一人前とは言えなかつたのであります。そうして一方柚の生活と密接であり、その移動の系統もこれと範囲をひとしくしていたようであります。

**彼岸から彼岸へ** 日本の農村における出稼ぎの生活には農業を中心として期節に重大な関係がありますが、ヒヨウの生活にもこの痕跡が充分認められるのであります。三河の山地における例で申しますと、一年をほぼ四期に分かつております。しかして、一方彼岸から彼岸へと言うのがこの種の人々の出稼ぎ状態を示した語であります。もちろん一年を通じてヒヨウの生活にあつた者は別であります。夏分は春の彼岸から秋の彼岸まで盆を境にします。中には田植えの期間だけ村に帰る場合もありました。これに対して冬季は新年前に一回、これは秋の収穫を済ましてから出るのであります。しかして年明け後に一回はでます。もちろん作業の状態はことごとくこの律に当て嵌めて計画されておらぬので、多くの例外を認めねばなりません。ことに深山におきましては、冬は作業を中止せねばならぬ場合がありました。これ

を要するに彼岸から彼岸を建て前として、それに盆と正月には家庭に還ったのであります。これには土地によってもそれぞれ約束がありました。

**モトジメ** 元締で荷主を言います。小規模の山では、元締が直接食料の配給、賃銭宿料の支払等の事務を執ることもありますが、いわゆる渡しと言って代人を設けて請負の形式で委託するものもあります。

**ソウサイ** 元締から委託される運材の一団の宰領であります。親方または大旦那とも言い、別に大庄屋とも言います。ヒヨウとしては最古参者で、山川の地理、技術すべてに通じていたのであります。

**ダイニン** 代人で、ソウサイの大庄屋に対して小庄屋または小旦那とも言います。山の大小あるいはその時々状況によって幾分異なる場合もありますが、早く言えば一個の組頭で、組下の者を率いてソウサイの統率に従って行動したのであります。一組の人員はこれもその時々状況で確定的ではありませんが、一般に三〇人程度であります。団列の規模の大小によって、この代人の数は五人とか七人等決まっておられません。

**キバナヤクニン** これは木鼻役人で、代人の次位と考えられております。木鼻すなわち作業団列の先登を承り指揮にあたる。

**キジリヤクニン** 木鼻役人に対する木尻役人で、団列のしんがりを承るものであります。以上、木鼻木尻役人は代人が兼務する場合もあります。

**ノベマワリ** 木鼻木尻の中間を承って指揮監督にあたるもので、以上はすべて役人衆と称したので、役の軽重で賃銭も差等があったことは言うまでもありません。

**ケダイ** これは一種の遊動役で、木鼻木尻の状況によって随時に配置を変更する。ケダイは最も腕利きの者を選んで充てます。

**オモリ** ケダイの次位にある者で、職分もこれとほぼ似ております。ちなみにオモリの語には別に材木の意もありますが、何を意味するのか判りません。

**ダイドコビヨウ** ダイドコは台所と思いますが、意味は判りません。臨時雇いというほどでもないが、一種景気づけに配置される者を言いました。これは作業の上にもあまり期待は置かれてありません。空元気で噪いでいて、実際能率の上がらぬ者をかく呼ぶ場合もあったようであります。

**コビヨウ** これは獺で言うと平勢子とも言うべき格で、一般のいわゆる仕事衆で追い廻しとも取れます。これが最も多人数を占めていたので、木尻、ノベマワリ等にそれぞれに配置されたのであります。

**カシキ** 炊きすなわち炊事係で各組ごとにたいてい一人ぐらいは配置されます。朝夕の食事と昼食の配分にもあたりますが山の状況によって昼食は各自が携行するので昼間は至って呑気であるとも言います。小規模の組織の山ではカシキは多く年少者で、朝夕の食事の世話の他に昼食の配給にあたり、このカシキで一定の年期を入れて漸次コビヨウに進むのであります。

**チャボウズ** 茶坊主で、茶の用意をして作業場の随所で茶の世話にあたります。茶坊主はその他ヒヨウの小間使いの役も勤めたのであります。

**ヒヨウ宿** 運材作業が山中で行われる際は、組ごとに小屋を設けて合宿を続けます。それが作業の進展につれて、部落のある土地に出て来た場合は、初めて民家を借り受けて宿泊します。これをヒヨウ宿と言います。大井川の上流駿河の安倍郡井川村の中田代、小河内等の部落では、ここ四、五〇年前までは、村民は夏分は焼畑作業に出て他屋住まいをする関係から家屋は多く空家になるので、それへ泊まったものと言いますが、そうした場合の家屋の使用料等が、どんな方法で決済されていたかは未だ究めておりません。ヒヨウ宿について、私の主として知っている三河の豊川上流地方では、川沿いの村々は予めヒヨウ宿と決まっておりました。これは村方に年額幾干として運上を納めていたのであります。古くは一種の株になっていたとも申しますが、近世では各所ともに一年切替で、正月初めに村ごとに入札に附して決定していたようであります。ヒヨウ宿は寝具の用意と室を提供するだけで、仕度はすべてカシキと茶坊主があたったのであります。私の生まれました村にも、日雇宿運上覚というような帳簿があったのを少年時代に見た記憶がありますが、その後再び見る機会がないので内容等を知ることは出来ません。なおこの機会に添えておきますが、ヒヨウの食餌としては、米の飯に赤味噌というのが通り言葉になっておりました。

**水神講** ヒヨウ仲間の講社で一つの相互組合で、一般職人の太子講にあたるものであります。この講社の成立は何を標準にしていたか判りませんが、川筋と今一つ地理的に範囲が定まっておリ、時には作業関係から、配属が区々の場合もありました。講社は水神の画像を中心にして各規約等を設けてありました。三河の寒狭川筋等においては、例年正月三日を総会として、当番の屋敷に集まります。その屋敷をやはり当屋と言って、一渡り祭典を行い、後は俗に言うお日待で直会に入り規約の改変等も行ったのであります。その他毎月三日を水神の祭日として、その日はいずれも業を休んだのであります。

**水神祭** 団列の中に災厄に襲われた者があるとか、あるいは土地によって難所を渡る時などには、前夜宿舎において水神祭を行います。ヒヨウとしての難所は多く懸崖とか瀑布であった関係からこれを滝祭りという場合もありました。定例としてヒヨウが滝祭りを行いましたのは、一例として申しますと三河の寒狭川筋では北設楽郡段戸山中の鳴沢の滝、南設楽郡長篠村の二の滝等で、天竜川の山室の滝、三河八名郡七郷村黒沢の百間滝等もヒヨウの怖れた場所で、かならず滝祭りを行いました。こうした場所は各所に存在したのであります。

**七五三の木** シチゴサンと言う。これは事実上運材団列の中心をなすもので、材木搬出の作業もまた一種信仰に立脚していたのであります。運材作業の開始に先立って、改めて杣の手で作成して渡すのであります。これに択まれる樹木はその山中において最も姿の優れた無節の檜で、杣は伐木の際前々からこれを選定して後に残して置くのであります。

この七五三の木を別にオイセギとも言います。その次第は先ず杣は服装を改め（このことは次に記す）予め選定してある樹に向かって式があります。これをオノダテ（斧立）と称します。先ず幣帛を作り餅、酒等を樹の根元に供えますが、これを山神を祭ると言います。これが終わってその年の恵方に向かって最初の斧を下ろすのであります。伐った木は、これを七尺の丈にして三寸と五寸の平角材を作ります。

この場合杣によって、作法が異なっていて、七五三は四寸角に取って丈は七尺五寸、八尺五寸、九尺五寸の各三本を seçむとするもあります。前の場合ではこれに「奉納伊勢天照大神宮」の文字を書くのであります。三本の場合は一を伊勢大神宮として他は讃岐の金比羅大権現、伊豆大権現の文字を書きます。

七五三の木すなわちオイセギを受け取った運材の団列では、これを神聖視して団列の先登すなわち木端に護持して途中特別の注意を加え漸次川へと下るのであります。かくして筏場に至るとこれを筏師に渡す。筏師は筏に載せて港に来ると、これを海通いの船方に渡す。船方はさらに大洋通いの船へと、かく漸次継ぎ送って、最後は伊勢なり金比羅に届けられたものと言いますが、仮に伊勢神宮に届けられた場合、これがいかに取り扱われたかは不明であります。しかもこのオイセギ中心の風習は、現今ではほとんど根絶していただけに一層知ることは困難であります。なお故老の談によると、オイセギは筏師、船方ともにこれが運搬にあたることを無上の吉祥として、争って乞い請けたとのことであります。

**トイマツリ** これは土居祭りかとも考えます。七五三すなわちオイセギをヒヨウの手で設けた堰の中に遷す儀式で、これをまたオイセギの式とも言い、作業開始の源をなすのであります。堰はすべて材木を組み立てて設けるのでありますが、これもまた姿のよい材料を選び先ずヤナ（梁）を組み込むのであります。これを一にオイセギを切ると言うております。七五三の木は、これを伐る役は杣のソウサイ（総宰？）であります。オイセギを切る指揮をなす者はヒヨウのソウサイであります。これは予め吉日を選び山神水神を祭り、杣の手から受け取った七五三の木を、ヒヨウ一同木遣音頭で堰に運び遷して式を終わるのであります。後は一同に酒肴の振舞いがあるのを定例としてあります。なおこの時杣、ヒヨウともに新調のカンバン（法被）を着るのであります。

**カンバン** 前に挙げた如く法被のことで、オイセギの式に杣ヒヨウの全部へ元締から渡るのであります。背にそれぞれ元締の定紋を染め抜き、役の高下によって紋に大小があります。すなわち紋の大きかったほど役は軽いのであります。代人の紋は普通直径一寸の定めで、次いで木端尻役人、ノベマワリ、ケダイ、オモリと、順次大きくなったのであります。ソウサイの紋は最も小さくて、これには時に縫紋などを用いる者もありました。

**ヤナ** 梁であります。前言うたオイセギの式にしてもそうでありますが、山地、溪谷間の運材には、至る処に堰を設け水を貯える必要があります。水量の程度に応じて材木をもって樋を設け、その上を流しあるいは迂らせるのであります。この場合堰止め作業の第一となるのが梁であります。梁は材木組立の形から言うたもので、これを設けるのは木端役人の指揮であります。最初にヤナマクラ（梁枕）を組み、その上に二本のヤゾと称する材をおき、次に梁杭となる木を立ててゆく、梁杭は中央の三本を坊主といい、これに入木（イレギ）を添加してゆく。坊主、入木間に生ずる間隙にはセギシバ（堰柴）と称し、小枝とか藤コケサ（苔）等を結び合せて水の漏りを防ぎます。これには第一それぞれ使用範囲による材木の選定を初め、材の組立にも特殊の技術を要するので、一度これを誤れば、いかに多くの堰柴を使用しても、水は保たぬのであります。木端役人の腕の見せ所であります。なお梁を組む場合、木端役人は、多くの材木の中から大小格好に応じて、枕、ヤゾ、坊主と次々に指定して行きます。この指定はすべて木遣音頭でやるのが古式で、木端役人の音頭に依りて、オモリ、コビヨウが、それを運んで据えつけるのであります。

ちなみに梁の坊主は最も細い材を選び、これに配する入木は外側に及ぶに従って

漸次太くしてゆくのであります。なおツギヤナと称して、地形に応じてさらに重ね積む場合もあります。

**スラ** スラはツラまたはシェラと言ひ、修羅の文字を充てた記録もあり修羅道などとも言ひます。一種の樋とも言うべきもので、断崖などを渡る場合、これで一種の栈道を作り、この上を材木を流しまたは迂らせるのであります。堰の中に浮かべた材木を次々に引き上げて迂らせます。スラには五段八段等の称があり、時にはこれが数十段の及ぶこともあり一大作業であります。一段は材木一本の丈にあたります。また時によっては、堰からこの上に水を走らせることもあります。この場合、各材の間に堰柴を詰めることは梁におけると同じで、これをメヌイ（目縫）とも言ひます。スラの設計もまた難事で経験の浅い者があつては材木の運行が出来ぬのであります。

**フクロ祝い** スラを設けて、これに最初に材木を通す場合は、時によってまた一つの儀式を行います。これをフクロ祝いと言ひ、スラの両側に笹を立て注連を張つて水神山神を祀ります。また作業の状況によっては、スラを掛けたまま越年することがありますが、その場合は、大晦日にスラの両側に榊を立て注連を張つて祭ります。

**ハナをオル** 梁あるいはスラを設けた場合、設計に不備があつて目的が充分達せられなかった場合、すなわち作業に失敗したことをハナをオルと称して、当事者は面目を失つたのであります。木鼻役人の最も苦心の存するところであります。現に私の知つていた老人に、このスラに独特の技能を持っている者があり、スラの設計に再三失敗した者から、ほとんど賓客の礼をもつて招かれ見事目的を達したことを、一代の面目として語つて聞かせました。余事が加わりましたが、かくして木鼻のものは先々へ梁スラを設けて進む。一方木尻にある者は、最後を始末して一本も残さず移動して行くのであります。この木鼻の作業をツクルと言ひ、木尻をカルとも言ひます。

**サデ** これには別に丹波サデ等の形式もあります。モヤ（一にサデシバとも言う枝つきのままの雑木）の六尺ほどのものをもつて、一種の栈道を設け、これに水を漉ぎかけて、その上を材木を引く、サデは断崖等を降ろす場合にも設ける。これは材木の激突破損を防ぐためもあります。なおサデには、土居、マヤ（厩）等の装置も併せ行われたのであります。

**カモ** これは一種の筏で、別にツクリガモとも言ひます。作業が次第に水量豊富



な地点に移って、材木は自然に水に浮かんで流れるようになると、カモの必要が出てくる。カモは木尻に用意されてあって、処々の岩の間、石などに引っ掛けた残り木を、これに乗って始末してゆくのであります。天竜川等の作業ではこれはぜひ必要であります。カモは材木を五本または七本藤蔓をもって簡単に筏にしたもので、浮揚力を増すために常に水に浸かる部分を焦がしておきます。なおカモを必要とせぬほどの小さな流れでは、ただの材木に乗って水面を渡る。この場合二本に跨り乗るをハサミノリ、一本に対して一丁木等の名があります。

**バラガリ** 前記水量豊富な地点へ出てから、筏場まで流し下るのをいう。その他タダ流し一本流し等の称もあります。

**アバ** 網場で、一定の場所を選んで網を渡し、これで材木を堰き止め整理する場所であります。アバを張る等の称があり、一方これを解く場合をノベルと言うております。

**トバ** 留場の意にも解される。バラ狩りが終局を告げて、いよいよ筏に組みまたはいったん陸に揚げる場所を言います。ヒヨウの作業はこのトバでひとまず終わるのであります。

**ナカト** 川中にある岩石を言います。

**ヤガラ** ナカトまたは滝口等で、流れて来た材木が絡みかかる、それへ次々に水勢に圧された木が重なり絡まって果てはこれが八重無谷になった場合を言う。こうした状態を解くことをツマリを抜くといいますが、これにも経験と技術があり、楔をなした材を発見してこれを抜き去れば、後は容易に解けるのであります。

**シャチを立てる** ヤガラが堅牢で、人力で及び難い時は、シャチを立てて抜くのであります。

**合図** 作業上における遠方からの合図には、流し、止め以外には格別ありません。流しは鳶口を上下、止めは左右に振るとしてあります。

**厭言葉** 厭言葉と言うほどのものも格別なかったようです。ただ材木の性質から、ナガスと言うことを嫌います。したがってカルまたはノベルと言うたのであります。これは余事ではありますが、川沿いを渡り歩いて、夏分鶴鴿の巣に遭遇した場合は、これを犯すことを甚だしく戒めた者もありました。

**カギザオ** 鳶口であります。これは柄の長さ五尺九寸のものと別に七尺、七尺五寸等あり、別に鳶口の頭にケンのついたものもあります。これは材木を突き出す場合に役立つのであります。柄の材料は竹もありますが、木もまた選みます。木は多

くミズメと称するものであります。なお筏に使用するものはノリザオと言います。

**ヨロイゴザ** 藁草で編んだ一種の蓑で、三河、遠江の一部地方では、ヒヨウ以外には使用しません。これは鎧の如く袖のあるものであります。なおヒヨウの着る蓑には別に笹蓑またはシバ蓑というものがある。これは水切れがよいところからもっぱら使用されました。

**カルサンと腰皮** ヒヨウの装束を特色づけたものは、縞のカルサンに毛つきのままの腰皮であります。カルサンは山袴の一種で、これに脛布を着け甲掛けに草鞋、それに菅笠（アア笠）を被った格好は一種軽快なものであります。腰皮は帯から尻の部分へ下げた敷皮で、これで随所に腰を下ろすことが出来ます。腰皮は犬の皮などをを用いるものもありますが、ニク（<sup>かもしか</sup> 羚羊）の皮が最も喜ばれたのであります。

**リュウボク** 流木で、洪水等の場合、材木がアバを切って流失するを言います。流木に遇った際、中途の川沿いに上がったものは、その地主に幾干の運上を支払って受け取るのが掟でありました。一方地主の方では、発見次第これに小石を載せて置くのが作法で、これは一種所有権の表示とも見られます。

**ミズキリ** 水切りで、元締めの場合で搬出の途中で、材木を川岸等に引き揚げるものを言います。これは木材の価格変動とかあるいは水量不足の場合に行うのであります。水量不足の場合なれば、雨天出水を待つて再び狩るのであります。ちなみに水量の多寡は搬出費の上に非常な影響を及ぼしたのであります。

**帳場初め** 正月二日を帳場初めと言うて、すなわち仕事初めの日であります。ヒヨウとしてはこの日はただの一本でもカギザオを打つものとしてあります。なおヒヨウは一年を通じて三りんぼうと不成就日（フジョウニチ）はかならず仕事を休んだのであります。

**シロキクロキ** シロキは白木で主として杉、桧を言い、これに対し樅、榎、松その他の雑木をすべて黒木と称してののであります。

## 附記

ヒヨウの生活を一部観察して、第一に考えられますことは、この種漂浪性をもった社会に供給させた人々の職業的階級とその家庭上の地位であります。私がある種の目的によって三河北設楽郡内の一部の山村について調査した事実は、あるいは這般の消息に対しても一面の参考となるものがあつたようであります。徳川時代三百

年間に、それらの村落の戸数はほとんど増加が認められません。この事実から当然考えられますことは、以前の村の家庭における二男三男のゆくえであります。分家が多く叶わなかった関係から、中には兄の家に生涯掛り人として、この地方のいわゆるオジボーとして、冷酷な境涯に甘んじて終わった者も少なくありませんが、その他のものは何らかの道を求めて外部に進出してゆきました。後年オジボーとして、極めて恵まれぬ生涯を終わった人の中にも、かつてある時代には、その一員として加えられていたのであります。そうしてその人々の選んだ道は何であったか、これを近世の事実について見ると、最も多かったのは、いわゆる旅を家とした職人であります。そうしてその職業の範囲は、山村の影響もあってか杣あるいは木挽等の山林の開発に縁の深いものであります。一方それとともに求められる職業は、このヒヨウ渡世であります。この社会に入った人々の中には、幾分ずつにもせよ物質的地歩を高めて行って、後には手頃の山林を手に入れ伐採してこれを川下の町に運んで次第に産を増し、いわゆる白木師として相当地位を高めた者も少なくありません。そうした一部の人々の他面には、漂浪生活の間にたまたま家を求め配偶を得て、贅養子または後夫として、土地を出る時には思いも及ばなかったような屋敷の、先祖祭祀をするに至った者もこれまた少なくありません。もちろん村を出て往った人の中には、ついには還らぬ者もありました。これも村々についてあたると、思いのほかそっちこちに数えられたのであります。

私の生まれた村なども、寛文あたりから明治初年当時までの、戸数移動の跡を辿って見ると、思い半ばに過ぐるほど屋敷は増していなかったのであります。しかもこれらの家々の血統は、ここ数代を遡って考えましても、連綿継続していたものは、全部三〇戸中の三分の一にも足りません。そうして他の三分の一は、贅養子または後夫として入り込んだ者の血統に改まっていたのであります。さらに穿鑿を一步進めて、この贅養子、後夫の出身地を見ますと、大部分は村の縁のない遠隔の土地で、その中の半数は、以外にも美濃路に縁のある、かつて木曾谷に木材の搬出に携わっていた人々であります。川沿いの部落における人文地理的の対照点は、これを下流に求めることはあえて不合理とは信じませんが、一方山間溪谷を辿って、地図の上では思いも及ばぬような土地の訪問者に、かつては接していたのであります。

これに対する木曾谷の状態は、三河の北設楽郡の山地における如き傾向にあったかどうか、事実について比較することが出来れば、これはたんに一地方のみの問題を解決するだけではないと信じます。